

第4回 事業の具体化に向けた 住民ボランティアによる協議



平井 寛 (日本福祉大学福祉社会開発研究所地域ケア推進センター 主任研究員)

はじめに

第1回のワークショップが成功し、住民主体の事業は第一歩を踏み出した。ワークショップで「こんな町にしたい」や「活動のイメージ」などのテーマについて自由に発想することで住民参加者は楽しくできた、積極的に発言できたという満足感を得たようだった。しかし、ここからは抽象的なイメージから具体的な事業内容へと収束させるプロセスに移っていく。事業の具体化のプロセスではメンバー間の活動のイメージと現実の状況、メンバー間の活動イメージのすり合わせが必要になる。

今回は先行事例視察、3回のワークショップ、小人数の住民ボランティア代表による準備委員会を通じて行われた事業内容の具体化プロセスを紹介する(表)。

先行事例視察

サロン運営ボランティアのうち、サロン活動がどのようなものかを知っている者はわずかであった。事業開催に向けて具体的な活動内容について協議していくには、たたき台となる活動イメージが必要である。町の保健師は視察先として、常滑市で活動する「はっぴいわん」を選んだ。町と大学で計画書を作成している計画期に一度視察したところだった。12月中旬から下旬にかけて、4回に分けて40人近くのボランティアが参加した。「はっぴいわん」は高齢化の進んだ市街地で倉庫を改装したスペースで定食やコーヒーを提供する食堂、空き家を利用したデイサービスの二つの活動を行っている。運営は代表のKさんとその友人ら有志で行われている。「老後

のよさを伝えたい、生きざまを伝えたい」という思いでやってきた。最初の3年は採算がとれなかったそうだが、いまはなんとかやっていけるようになったとKさんは語った。

参加したボランティアからは「活動内容の参考になった」という期待どおりの感想以外に「代表・ボランティアに感心・感激した」「元気が出てきた」など感心し、励まされたという効果も大きかった。

第2回ワークショップに向けての打ち合わせ

第1回ワークショップは日本福祉大学のH先生にファシリテートをお願いしたが、第2回からは町職員が担当することになった。第1回のワークショップとは異なり、大きくふくらんだイメージを具体的な活動内容に収束することが求められる。そのためにはテーマ設定や話し合いの方法にもこれまでと違う工夫が必要である。町と大学はワークショップ準備のための打ち合わせを2回にわたって行った。

武豊町プロジェクトでは町内の複数箇所でサロンを行うことを目指している。これを実現するためには、各サロンの運営を担当する複数のボランティアグループをつくる必要がある。そのグループ分けをどのように行うのが第一の課題であった。

開催頻度が月に1回程度なのか、毎日のように開くのか、活動内容は体操や工芸などメニューを準備するのか、立ち寄って話ができればいいのかなど各個人が持っている活動イメージはさまざまであることが予想された。一方、活動内容よりも自分が参加しやすい地域で参加したいというボランティアもいると考えられた。自宅近くでやりたい人もいれば、

表 武豊町介護予防モデル事業計画準備会議・先行事例視察などの日程と協議内容

日付	会議・視察	内容	結果（決定事項・感想・意見など）
12月 中旬～下旬	先行事例視察	「はっぴいわん」（常滑市）見学	たたき台となる活動イメージを持たせた活動のリーダー、ボランティアに感心した。励まされた
12/26 1/22	ワークショップに向けた打ち合わせ	第2回ワークショップの運営の仕方、グループの分け方について検討	内容別のグループか場所別のグループにするか両方を提案することを決定
1/29	第2回 ワークショップ	事業の具体化に向けた検討課題の抽出	抽出された検討課題 ・開催場所 ・活動頻度・時間帯と内容 ・町の事務
2/7	第1回準備委員会	ワークショップで抽出された課題の検討	準備委員顔合わせ・自己紹介
2/20	先行事例視察	「岩滑地区サロン」（半田市）見学	飲食物の提供についての困難性の理解 活動を始めていくことが必要
3/1	第2回準備委員会	ワークショップで抽出された課題の検討（場所の検討）	地区別のニーズ・リソースのデータを参考に候補地を3カ所に絞る
3/7	第3回準備委員会	開催候補施設視察	候補施設の立地・設備の確認
3/14	第4回準備委員会	ワークショップの運営方針の検討	ワークショップの運営方針決定
3/22	第3回 ワークショップ	各チームの活動概要発表	候補地を提案 拠点別チーム結成 活動概要を決定
3月末～5月	チーム別協議	開催に向けた準備	活動内容の詳細決定
5/11	第4回 ワークショップ	各チームの活動メニューの発表	オープニングセレモニーの内容 第2回以降の活動内容について
5/27	大足会場開所	オープニングセレモニー	参加 161名
6/19	上ヶ会場開所	オープニングセレモニー	参加 150名
6/21	玉貫会場開所	オープニングセレモニー	参加 153名

逆に遠くでやりたい人もいます。活動頻度や内容の似た人をグループ化するのがいいか、大体の開催地域、開催場所を決めてそこに来られる人を地域別にグループ化するのか。次のワークショップで話し合いを行う際にどのようなグループで分けるのかが町の担当者の悩ましいところだった。どちらかに決めずに町とボランティアと一緒に考えようと提案するかたちをとろうということになった。どんなかたちでやりたいかを参加者に聞き、聞きながら模索し固めていければいい、そのために意見が出しやすいような資料の準備をしようという方針が定まった。「いろいろな意見は出ると思うが、まずはやってみる。ダメなら次回しきり直し」

このワークショップで必ず何かを決めるということを目指すのではなく、時間がかかってもじっくり話し合っていこうという覚悟ができたように思われた。

第2回ワークショップでの検討課題抽出

第2回ワークショップの参加者は男性13人・女性27人であった。武豊町の四つの小学校区に該当する地域別の4グループと、地域に所属せず各地域に出張して活動メニューを提供するボランティアの集まり「出前グループ」の五つのグループに分かれて話し合いを行った。

話し合いのテーマは、活動を行ううえで決めていかなければならない検討課題を出し合うことであった。ボランティアおのおのが書いた検討課題を集約し、最後に方眼紙に書いてグループごとの発表をしてもらった。

検討課題として抽出された内容は、① 活動の基本となる会場の決定について、② 開催日時や時間、飲食物の提供など活動・サービス内容、③ 参加者勧奨のための広報、予算管理などの町が担う事務に関することの三つに大別された。

各グループでの話し合いはすべて順調に運んだわけではなかった。話し合う内容が具体的になればなるほど参加者間で意見の食い違いがあり摩擦が生じた。例えば、活動頻度・内容については、月1~2回程度開催し、講座や体操などしっかりプログラムを行うようなものから、毎日開催するが特にプログラムを行わず立ち寄った人が自由におしゃべりをするタイプのものなどさまざまな活動形態があると考えていた。しかし、ボランティアの多くは月1~2回の頻度での開催を考えていた。町職員が関われる現実的な頻度ということが考慮されていたのかもしれない。その中で毎日開催型のイメージを持っていた人は孤立するかたちとなり、グループの雰囲気は一時険悪になった。その人はその後ワークショップにはあられなくなってしまった。

このようなずれが生じるのは事業の頻度・内容を定めずにボランティアを募集したために生じたと考えられる。さまざまな選択肢からボランティアが民主的に決めるというメリットがある一方、このような摩擦が生じるというデメリットもある。

このワークショップは試験的なモデル事業を立ち上げることを目的としていたため少数派は淘汰されていってしまうことになったが、武豊町プロジェクトではモデル事業以外に地域の既存の取り組み、個人での取り組みを支援する。所定の条件を満たすものを認定し、活動費用や利用者への情報発信などの支援を行う体制を整備している。詳しくは次回以降に解説する。

出された検討課題の詳細な検討は大人数のワークショップでは難しい。具体的な活動頻度、場所、活動内容などについてワークショップメンバーの代表による少人数で協議し素案を作成することとなった。ワークショップの最後に代表となって検討課題を話し合うメンバーの立候補を求めた。このとき自然に、小学校区の各グループから代表者を選出しようという意見が出された。この少人数の協議に参加してほしい人には事前に参加を求めると呼びかけてはいたのだが、その意見はそれとは関係なく出されたものだった。グループから代表を出すという意見自体は格別新しいアイデアではなく自然なものではあるが、町の意図とは関係なく提案され、ボランティアの意志で選ばれた方針であることに意義が

あったように思われる。

準備委員会による課題検討


第2回ワークショップ後に選出された代表者のグループは「準備委員会」と名づけられた。この準備委員会の最終的な目標はサロン事業の会場の決定、開催日時や時間、活動内容について検討し、3月22日のワークショップに事業内容の素案を出すことであった。

しかし、第1回準備委員会ではすぐに課題の検討には入らなかった。H先生の提案で、お茶とお菓子を用意して和やかな雰囲気をつくり、自己紹介を行い、それぞれの意気込みや思いを話すことから始まった。ボランティアの中で選ばれた準備委員とはいえ意見や活動のイメージ、思いはさまざまであり、ボランティア経験にも差がある。具体的課題も大事だが相互理解のうえで議論しないと無用な摩擦が生じ得る。H先生の真意はわからないが、まずは信頼関係を築くことを重視しているように思われた。

重要な検討課題の一つに開催場所の選定があった。これについては、2006年7月に行った事前調査を基に地区（国勢調査区）別の要介護予備群の数などのニーズについての情報、ボランティア参加希望者の数というリソースについての情報を集計した資料を大学が検討の材料として提供した。この資料は会場候補地決定の際の根拠として十分に活用された。地区単位ではなく、会場候補地からの一定の距離にいる要介護予備群の数と事業へのボランティア参加希望者の情報が欲しいなどの要望が出され、大学側（筆者）は何度か修正版を作成した（図）。

準備委員会メンバーの提案により、区が主体となりサロン型事業を行っている半田市の岩滑地区の事例視察を行った。ここでは、豆から挽いた本格的なコーヒーを出すことが特徴の一つであった。この視察は活動内容、特に飲食物を提供することによる参加促進の有効性と衛生面での困難さを理解するのに役立った。また「これまで活動内容をどうするかを考えてきたが、何をやるかよりもまず動き出していく、活動を始めていくことが重要ではないかと思った。そういう意味ではちょっと気が楽になった」と

サロン事業のニーズとリソース



会場候補	ニーズ 会場から500m 以内の要介護予 備単実人数	リソース 会場から1,000m以 内のサロン事業協力 者実人数
北山区民館	3	10
馬場公民館	5	7
市場公民館	9	13
上ヶ公民館	6	9
玉貴老人憩 いの家	12	15
大足公民館	14	6
富貴公民館	4	5
笠松公民館	9	8

図 準備委員会での要望を踏まえ作成した資料

いう考えが準備委員会で共有されるようになった。

3月14日の最後の準備委員会では、1週間後に迫った第3回ワークショップの流れをどのように運ぶかが中心的な議題となった。これまでワークショップの流れは町職員と大学で考えていたが、このときから住民ボランティアと町職員が考えることになった。

場所の候補については町が提案し、3カ所の候補地別にグループ化して活動内容を住民で決めようということになった。なぜこの三つの候補地に決めたのかという疑問が出るのが想定されたため、それを説明できる資料を準備しようということになった。それでもうまく話し合いができるかどうかはわからなかったが、「一度グループに分かれて考えてみてダメだったら統合すればいい」「ボランティアの人数が足りなければ1カ所でもかまわない。無理せずできる範囲でやろう」ということになった。さまざまな可能性を考慮しつつ柔軟性を持って臨もうという姿勢は第2回ワークショップ前の町職員の打ち合わせの結論に似ている。

第3回ワークショップから開催まで

ほかの会合と重なったため、参加者は26名とやや少なめだった。準備委員会での話し合いの結果を紹介し、たたき台となる活動頻度・内容の選択肢の提案を行った。また活動を支援するため、予算の確保の報告、ボランティアの担当配置決めや会計事務、実績報告を行う職員を各ボランティアグループに配

置すること、そしてその業務は1年後を目処にリーダーに移行したい旨を伝えた。

3カ所の候補地でモデル地区として実施したいということを提案し、参加者の26名はその3カ所に分かれた。これが初年度のモデル事業3拠点を担当するチームとなった。その後の1時間ほどで各グループで活動頻度、時間帯、大まかな活動内容を決定した。短い時間だったが、各グループでチームカラーをつくろうという提案もありチームの結束を固めていこうという雰囲気が感じられた。

第3回ワークショップ後、結成された3拠点のチームで個別打ち合わせを行い、開催へ準備を進めた。第1回の開催をオープニングセレモニーとし町長をはじめとする来賓を呼ぶこと、手品や演奏などの演者に依頼してイベントを行うことなどが企画された。

活動2回目の開催内容については3拠点さまざまだったが、どんな世代の人が来るのかということの想像がつかないためお膳立てするより来た人の意見を聞き、その後決めていけばいいというチームもあった。これらは第4回ワークショップで発表されてチーム間で意見交換が行われた。町職員の話によれば、この時期3拠点でかなりの温度差があった。ボランティアの人数も集まり和やかに準備ができているところもあれば、事前調査ではボランティア希望者も多く順風満帆に進むだろうと思っていた地区でまったく人が集まらず、話し合いもうまくまとまらないというところもあったようだ。

おわりに

今回はワークショップでの住民の協議により活動内容を具体化し、事業が開催へ至るまでのプロセスを記述した。

先行事例の視察は活動のイメージづくりを目的に行われたが、活動に取り組む人たちの生き生きとした様子から感じた「何をやるかよりもまず動き出していく、活動を始めていくことが重要ではないか」という気持ちが開催までの準備を進める原動力となっていたと考えられる。

またボランティアの代表として選出された準備委員による準備委員会での検討では、事業を担ってい

くリーダーが出てきた。このリーダーたちがパートナーとして町と一緒に事業をつくっていった。これは従来の介護予防事業とはまったく違うものであった。

ワークショップでの話し合いを準備する際に、町職員だけでなく準備委員会でも、各拠点チームが活動メニューを考える段階でも共通していたのは、「まずはやってみる、柔軟に対応する、だめだったらやり直す」という姿勢だった。想定した結果にはめ込んでいくのではなく、ある程度の予測や展望を持っ

たうえで議論し、迷走したりうまくいかなかったらまたやればいいという心構えがあった。これがモデル重視型でなくプロセス重視型事業を行う際に必要な心構えなのかもしれない。

第2回から第4回まで、武豊町でポピュレーション戦略に基づく一般高齢者施策として取り組まれたサロン事業の計画から開催までのプロセスを紹介した。今回は開催から1年半が経過した現在のサロン活動の様子、事後調査によるサロン事業の効果評価結果を報告する。